

# 古式錫杖の形状

大和久 震 平

## The Form of old-type Khakkhara

Shinpei Ohwaku

The Khakkhara is one of eighteen implements which are allowed bonzes to carry at all times. According to old scriptures, it had been used as a stick for aged or ill bonzes, to get rid of vermin during ascetic exercise in mountains or moor, to make a signal of mendicant in front of houses, and so on. As one of belongings with ascetic people, it seems that the Khakkhara had been used before the establishment of Buddhism. It was in the 6th century when it has been brought over into Japan at the same time as Buddhism.

With the prosperity of Buddhism, Khakkhara had been become ornamental, and the meaning of each ornament had been given weight in scriptures. This means it had been changed from a practical implement to a ritual one.

Khakkhara has two types, old-type and new-type. In the middle of the 12th century which was the end of Heian period, new-type had appeared. In this paper, I'd like to try to chronicle and study the old-type Khakkhara's original form by examining the archeological Khakkharas and the Khakkharas of Nara or Heian period' which are still kept in temples.

### I. はじめに

ここで取り上げる問題は錫杖概説や錫杖の一般的形態の解説ではなく、対象を錫杖のうちの古式とされているものに限定し、形態的特徴を個別に説明したあと、分類を行い、その上で資料の編年を試みて、形態の変化の流れを明らかにしようとするものである。

錫杖は杖頭・杖部・石突きの3部分から成る。通常は3部分を別個に作り、相互に嵌入して一具となるものであるが、正倉院蔵のなかの1例、日光山輪王寺蔵伝勝道所用の1例に見るように、稀には3部分を一体に造り出した錫杖もある。3部分のうち長い棒である杖部と、この下端にある石

突きは、使用上の実用部分であるため、どれも似た形になっていて、形態上の変化に乏しい。これに対し杖の上部に装着する杖頭は極めて変化に富み、形態的特徴が顕著に現われている。錫杖分類の基準としては、他の部分より格段に立ち勝っている。多くの場合、錫杖頭は杖部から取り外して保管された。すなわち着脱可能な部品である。これは『大安寺資財帳』に記録されている通りで、杖頭だけは特別に取り扱われたようである。本稿では錫杖一具のうち錫杖頭を主に述べて行くことになる。

錫杖のうちどのような形のものを古い形態—古式とするかがまず区分の根本になるが、これは製作年代にも直接関係するので、このあと具体的な

資料によって細かく説明したい。本稿で取り扱う資料の中心部分は栃木県日光市男体山頂遺跡の出土品で、これらは著者が実見し実測した資料であるが、その他については実見したものよりも著書や写真等によるものの方が遙かに多い。稿中の図もこうした文献から起こしたもので、見取り図程度と考えて頂きたい。古式の錫杖については略稿を学会誌に発表したことがあるが、紙数制限があってほとんど意を尽くしていない。本稿は前回不十分であった資料や文献を十分に加え、誤りを正し、考察を新たにした。

## II. 古式錫杖に関する基本的文献と資料

### 1 文献にみる古式錫杖

錫杖は僧侶が常時携行すべき比丘十八物の一具であり、原名は Khakkhara (喫棄羅) で、鳴声すなわち錫杖の発する音を擬した名称とされている。義浄の『南海寄帰内法伝』巻第四の錫杖の項の割注に「言錫杖者。梵云喫棄羅。即是鳴声之義。古人誤為錫者。意取錫錫作声鳴」とある。仏具の分類では錫杖を梵音具に入れるが、喫棄羅本来の意味からは妥当な区分であろう。室町時代に九州の英彦山に止住した日光山の客僧阿吸房即伝は、彼が選述したとされる『修験修要秘訣集』巻上の「第七錫杖之事」で、錫杖の形態と各部の意義付けを行っている。即ち錫杖の輪に掛ける遊環の数について4は声聞の錫杖で苦集滅道の四諦、12は縁覚の錫杖で十二因縁、6は菩薩の錫杖で六波羅密を表し、円形をなす輪は無際の大虚を表し、輪の頂部の五輪は法界の塔婆、輪の内部の3個の五輪は実相の宝塔を表す。輪の外縁の4個の半月形(金剛牙)は東南西北の四州を表し、六角の柄は六道をあらわすとしている。つまり錫杖各部にそれぞれ仏典を引用して一々の意義を説明しているわけであるが、実用具として発生した錫杖が当

初からこのように考えられていたかどうか、この点はかなり疑問である。即伝の説明する錫杖の形態は、編年の上ではかなり下降したものであって、これは彼が自分の生きた時代の認識の範囲のなかで、錫杖を荘厳し意義づけたものと考えらるべきであろう。従って即伝の錫杖に関する記述は、古式の錫杖に対する説明になっていないことを承知しておかなければならない。

僧侶が携行する錫杖については『四分律』巻第五二、『十誦律』巻第五六のなかで山野の修行の際の害虫回避、『毘尼母經』巻第五にはこのほかに老病の僧侶のための杖、『根本説一切有部毘奈耶雜事』巻第三四、『南海寄帰内法伝』巻第四には僧侶が乞食に際しての合図としてある。どの説をとっても初現の錫杖には面倒な意義づけがなく、僧侶の生活に必要な実用の具であったことが分かり、杖としての単純な形からみて、上記の諸経にあるいくつかの用途は共に果たしたものと考えてよい。

錫杖の古い形態については『南海寄帰内法伝』巻第四に、「西方所持錫杖。頭上唯有一股鉄捲。可容三二寸安其鋤管。長四五指。其竿用木。鹿細隨時。高与肩齊。下安鉄纂。可二寸許。其鑲或円或偏。屈各合中間可容大指。或六或八。穿安股上。銅鉄任情」とある。西方の錫杖は杖部が木製でひとの肩ほどの高さがあり、上端に直径2、3寸の鉄製の輪をつけ、この輪に、銅か鉄でできた親指が入るほどの大きさの遊環を6個か8個下げる。遊環の形は円形か楕円形である。杖部の下端に幅2寸ほどの鉄帯がつけてある、という大意である。ここに述べられている錫杖は上記諸経にある錫杖に符合する実用の具であり、しかも簡素な造りであつたことが分かる。この書は中国僧の義浄がインドからの帰途の見聞をまとめた記録で、7世紀末に選述された。古い錫杖を知るための好史料である。

同様のことは『根本説一切有部毘名耶雜事』巻

第三四に「仏言。不応打門可作錫杖。芯芻不解。仏言。杖頭安銀円如蓋口。安小銀子揺動作声而為警覚」とあり、錫杖頭の造りは輪と遊環の組み合わせからなる簡単なものであった。Le Goq の『Die buddhistische Spätantike in Mittel Asien』fig.12の図の僧が手にする錫杖の造りは、杖頭部が金属の棒に輪をつけただけのもので、これに小環が6個つけてある簡素なものである。この図は中央アジア新疆省ウイグル自治区で、20世紀初頭にドイツの探検隊の手で発見された壁画の一部であり、6～7世紀頃のものとしてされている。年代的に義浄の見聞を裏書きするような資料であって、この頃までこうした簡素な錫杖が使用されていた点に注意を向けておきたい。元来仏徒の実用携行具であった錫杖は、仏教の蔓延発展とともに用具に対する意義づけがなされるようになり、杖頭の荘嚴が始まり、形態の複雑化・多様化が始まるようである。

我が国に錫杖がもたらされたのは仏教の渡来と同じ頃と考えられており、錫杖経も同時に伝来したとされている。この錫杖経は『九条錫杖』であったという。『九条錫杖』には錫杖を持す効用が述べられているが、錫杖の形態に触れた部分はない。効用については三宝を供養し、六波羅密を修め、その音は懈怠・破戒・不信など様々の悪をなす者たちを浄心に立ち返らせ、外道・鬼神・毒獸・害虫など人に害を及ぼすものも菩提心を発し、十方世界の餓鬼・畜生・受苦の衆生も直ちに解脱すると述べてあるが、錫杖の形や杖頭部の荘嚴には触れるところが全くない。『九条錫杖』は錫杖賛歌といった性質のもので、錫杖の形を説明しているわけではない。

錫杖経でも『得道梯橙錫杖経』には即伝の選述に似た形態上の意義づけがみられる。名称について「是錫杖者。名為智杖。亦名徳杖。彰顯聖智故。名智杖。行功德本故曰徳杖」とあって、錫杖が智杖または徳杖と呼ばれていたことを明らかにして

いる。さらに「是杖有三鬲。見三鬲重。則念三塗苦惱。則修戒定慧。念三災老病死」、「復有四結者。用断四生。念四諦。修四等。入四禪。淨四空」、「通中鬲五。用断五道苦惱輪廻。修五根。具五力」と錫杖の特質を述べ、杖頭の輪に装着された遊環について「十二環者。用念十二因縁」、輪の外縁の鈷（金剛牙）について「有杖是同。若用不同。或有四鈷。或有二鈷。環数無別。但我今日四鈷十二環用是之数。二鈷者迦葉如來之所制立」とある。

この經典には錫杖を持する際の意義や規定として「持錫杖威儀法」があり、「有二十五事。持錫杖十事法」と25の項目が記されている。これには「錫杖四鈷應四諦。環應十二因縁。中召明中道義。上頭應須弥頂。第二應須弥山。中央木應於空。下錯應須弥」という根本的な考え方があり、錫杖頭から石突きに至るまでのいちいちについて、各部の意義づけを行ったものである。錫杖の取り扱いについては『又持錫杖法』があり、「錫杖有二十五事威儀」としてこれも25項目を立て、細かい作法を説いている。

錫杖は仏教渡来と時を同じくして将来されたと言われるが、仏教の渡来は公伝であれ私伝であれ6世紀代のことになるので、これを確かめる文献や資料は今のところみつからない。7世紀代では、法隆寺の玉虫厨子の背面に描かれた錫杖の図が唯一のものである。8世紀になると錫杖に関する記録がやや増加する。現存の資料として正倉院に3例、法隆寺に2例の錫杖があるほか、大寺の資財帳に錫杖の記録が散見している。

『大安寺伽藍縁起竝流記資財帳』に「合錫杖肆枝、二枚白銅頭、二枚銅頭、中一枚無茎、並物」となあり、、『法隆寺伽藍縁起竝流記資財帳』に「合錫杖二枝、弥勒仏分壹枝、長五尺一寸五分、觀世音菩薩分壹枝、長五尺九寸八分」、、『筑紫觀世音寺資財帳』に「錫杖參柄、同前帳云、見在二柄之中、一柄之中、一柄全、一柄折者、今檢已見在、但一柄無」とあって、この頃の南都や太

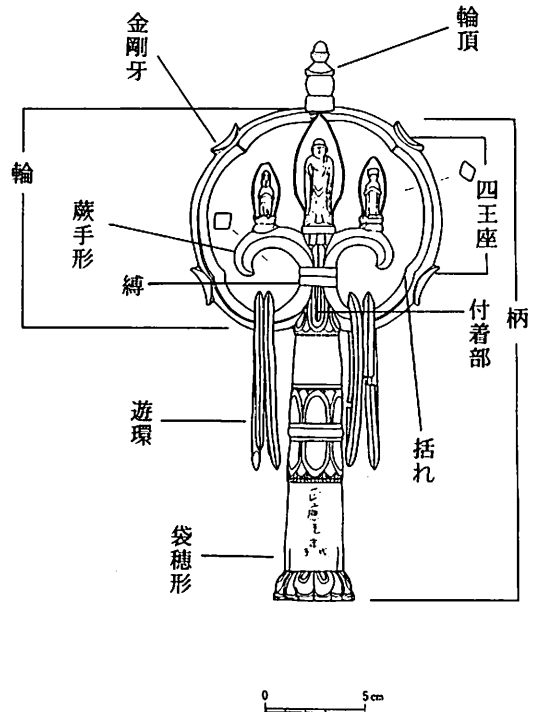
宰府の大寺には、錫杖が寺の備品として保存されていた様子が分かる。奈良時代の大寺では、法会に相当数の錫杖衆が参加していたようである。『東大寺要録』の「供養章開眼供養会」の項には「錫杖二百人」、「供養章之余御頭供養会」の項には「一打、錫杖衆、登自舞台、誦錫杖文、登降之間、奏高麗楽」とあって、多人数の錫杖衆が錫杖を鳴らして誦経する様子をうかがうことができる。また同時に、こうした錫杖の使用法は、古い經典には見られないものである点も、合わせて考えておかなければならない。

錫杖に関するいくつかの仏典や文献を一瞥した意味は、この仏具が本来は音を発する杖として僧侶が携行する実用の道具であり、音を出す仕掛けは金属の輪と環の単純な組み合わせである、ということの確認であった。単純から複雑へという道具に通有した性質が錫杖にも認められるわけで、時代の下降に従って形態、特に錫杖頭が複雑に造形されるようになり、この意義づけに新しい仏典が選述された。

我が国に将来された錫杖は大陸の影響を受けながら形態の変化を重ね、近世になると諸寺の蔵品に見られる巨大な錫杖頭の出現になる。一抱えもある真鍮製の頭部は、寸法と重量の点で杖頭に装着できるものではなく、壇上に設置して声明に合わせる音響具である。この仏具は錫杖本来の意義からまったく逸脱し、機能も異なる。巨大錫杖と裏腹になる錫杖に手錫杖がある。杖頭部は通常の錫杖頭と同じかやや小ぶりであるが、杖部が極端に短く、杖というより柄と呼ぶべき寸法で、手に持ち、振って音を出す道具である。梵唄や読経の拍子をとるために用いられ、修経道で多様されていることは周知の通りである。手錫杖は我が国独自のものとされるが、杖としての機能は果たすことができず、本来の意義を逸脱したものである。本稿ではこの種の錫杖は取り上げない。

## 2 錫杖の基本資料

### 1) 錫杖頭各部の名称 (挿図1)



挿図1 錫杖頭各部の名称

錫杖の各部分については、論者によって呼び方が違っている。それぞれ典拠があり、また慣行に従った場合もあるが、本稿では錫杖の研究者であり戦前の資料を集成した香取秀真氏の使用用語を基準とし、語を若干補足して使用していきたい。挿図1は栃木県日光市日光山輪王寺蔵の正応元年(1288)銘錫杖頭である。銅製で高さが28.8cm、柄の下部に日光山女体権現へ奉納した施入銘と年記が針書きしてある。この錫杖頭はあとに述べる古式のものではないが、全体的な把握はこれで十分であることと、新旧の区別に触れる際に必要な部位があるので、この図を参考にしながら各部の名称を述べてゆく。

錫杖頭は装飾・荘厳の部分を取り除くと極めて簡単な構造の道具で、基本的には細長い真っ直ぐな金属の棒に、これも金属の棒を曲げた輪を接着させ、輪に左右同数の小さい環を吊り下げたものに過ぎない。この単純な形がさきに述べた西域の洞窟壁画の図で、古い経典にある喫棄羅と考えるとよい。挿図1の中で図の中心をなしている棒が「柄」、棒の外側にある円形が「輪」、輪が内側にまくれ柄に沿って反転した部分が「蕨手形」、この蕨手形がさらに反転して輪の内側に円形を造る場合は、外側の輪は外輪、内側の輪は内輪と呼ぶ。外側の輪の外縁には、普通上下左右の対称位に1個ずつ合計4個の三日月形突起がつく。突起の位置は密教の教義によって四天王を表すとされ、「四王座」と呼ばれている。ここに付けられた突起を「金剛牙」という。図では金剛牙が4個で通常の配置であるが、稀には6個配置されたものがある。この場合には上位の4個が四天王、下位の2個が梵天と帝釈天を表すとされている。

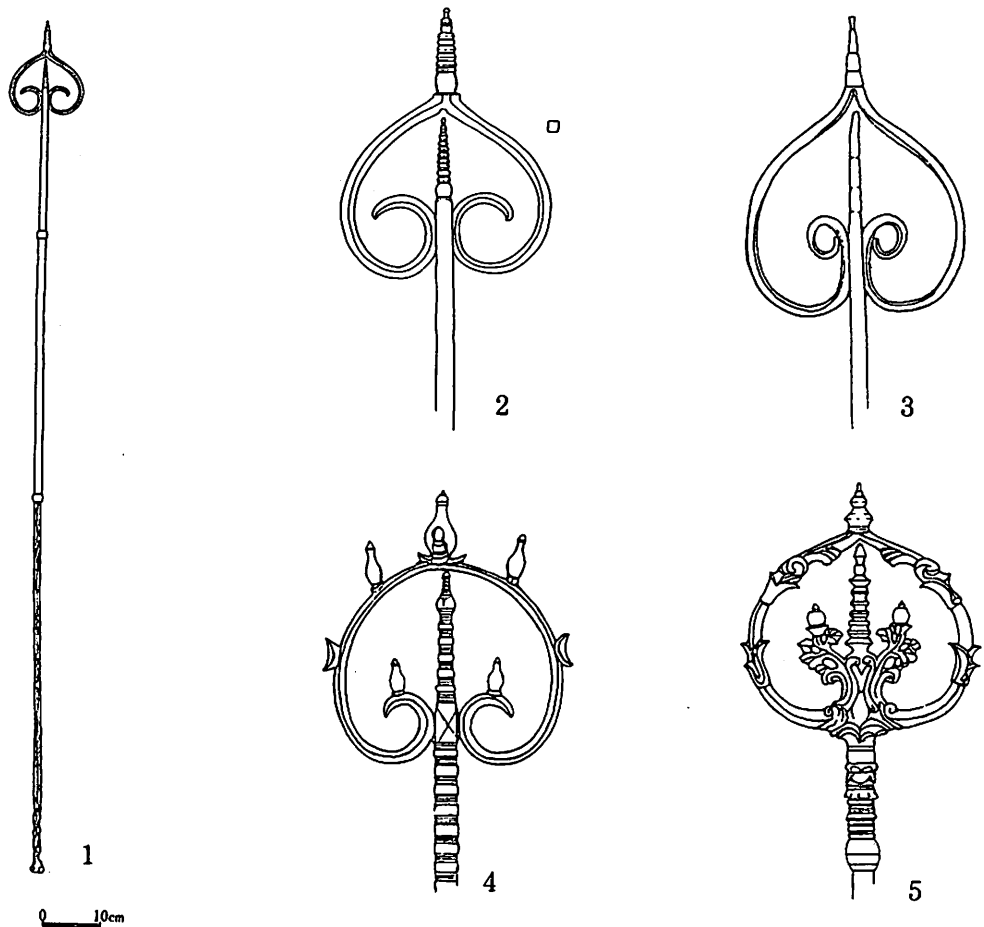
輪の形は円形を基調とするが、宝珠形ないし心葉形をなすものがある。輪の途中が2個所か4個所、対称位にくびれている場合がある。これを「括れ」と呼び、多くはここに金剛牙が付けられている。輪には鉄製か銅製の「遊環」が付けられる。環には大小があるが、どちらにしても振動によって音を発する為のもので、柄を挟んで左右同数に下げるのが原則である。環の数は4・6・12に分かれ、4環は声聞杖、6環は菩薩杖、12環は縁覚杖とされている。出土品の中には左右で数の異なるものがあるが、当初からこのように装着したものか、土中であって腐朽し欠落したものであるかは判断できないし、環の多少で時代の判別はできない。

柄の部分は輪の中に突き出した「上部」、柄と輪の下部との接点になる「付着部」、杖の上端に連なる「下部」の3区分になる。「下部」は柄に対する装着の仕方では形が異なる。槍や剣の茎のよ

うに杖の木部の中に挿入するものを「挿入形」、鉦のように下部が袋状になっていて杖を差し込むものを「袋穂形」と区分する。錫杖は身長に近い長大なものが普通であるが、前に述べた手錫杖は杖部が著しく短く、一般に錫杖頭の造りが華奢である。挿図1の輪王寺蔵錫杖頭はこの手錫杖である。図のものは4個の括りがある。括りのある錫杖頭のすべてが手錫杖ではないが、後世に手錫杖の多いことは事実で、これは諸寺の現藏品に数多く見られる。我が国における括りのある錫杖の初出は、静岡県鉄舟寺蔵康治元年銘(1142)錫杖で、錫杖に年記を刻むのもこれが初出である。古式錫杖のうち、平安時代初期に空海の手で唐から将来されたとされる香川県普通寺蔵の錫杖頭は、高さが27.0cm、金銅製の美しい造りで、3条の隆帯を表した輪は左右2個所がくびれ、輪頂が開いて火炎に囲まれた宝珠が付く。輪内には阿弥陀三尊と四天王が配される特異な作品である。これに似た錫杖はSteinの『Serindia』所収の敦煌壁画にあり、五代から宋の頃のものといわれる。どちらも大陸の形制によって造形された作品で、影響を受けたとはいえ、我が国の錫杖とは趣を異にしている。普通寺蔵錫杖頭は将来品として除外すると、輪の括りの有無が古式と新式を区分する形態上の目安になり、鉄舟寺蔵品を新式の基準にして、本稿ではこれ以前の括りのない錫杖を取り扱うことになる。またこの錫杖の年記を勘案して、12世紀中葉が対象年代の下限になる。

## 2) 年代の基準になる古式錫杖

前項で述べた康治元年銘錫杖が年記を持つ最古の錫杖である。これ以前には、伝世品にも出土品にも年記を刻む錫杖は無い。従って製作年代の新旧は形態の変化によって推量しなければならないが、年代の基準になるような古式錫杖が全くないわけではない。そのひとつが日光山輪王寺蔵の伝



挿図2 1・2 伝勝道所用錫杖 3～5 正倉院蔵錫杖 (2～5 縮尺不同)

勝道上人所用の錫杖、他は正倉院蔵の錫杖である。このほかにも何点か挙げられるが、古式の基準として上記のものを瞥見してみようと思う。

① 伝勝道所用錫杖(挿図2-1・2)

勝道は奈良時代末から平安時代初期の頃に活躍した下野国芳賀郡出身の山林仏徒で、男体山に初めて登頂し、日光山を開山した。奈良時代にしばしば文献に現れる山林修行者のひとりである。彼の名は正史には見えないが、空海撰文の「沙門勝道歴山水瑩玄珠碑序」(『遍照発揮性靈集』第二所収)に勝道の事蹟が詳しく述べてある。碑文

は偽撰の批判があるが、醍醐寺本の詳細な検討から平安時代初期の成立が立証されていて、勝道の事蹟の年記もほぼ間違いないものと考えられている。勝道の男体山登頂の試みは神護景雲元年(767)と天応元年(781)の2回で、これは失敗に帰し、天応2年に3回目を試みて成功したとある。登頂後中腹の中禅寺湖畔に神宮寺を建立して止住し、のちに湖北に移り、延暦年間上野国講師に補任された。没年は弘仁5年(814)頃とされている。彼が日光山に止住した期間は神護景雲元年から延暦13年(794)を若干過ぎた頃までであり、その後は講師として上野国分寺に止住するように

なったと思われる。大同2年(807)に下野国司の要請により男体山頂で祈雨の修法を行ったが、これが彼と日光山を結んだ最後の記事になる。8世紀後半から9世紀初頭、即ち奈良時代末から平安時代初めが、彼が日光山と縁のあった年代である。図示した錫杖は勝道所用として長く輪王寺に伝世したもので、言うまでもなくこの旨の銘や年記は刻まれていないが、研究者の多くから勝道所用の蓋然性は肯定されている。本稿でもこれに倣い、上記の年代観を与えて基本資料にした。

挿図2-1の錫杖は全体が鉄の鍛造品で、杖頭から石突きまで完存する。総高が149.2cm、杖頭と杖部の間と、杖部の中間には幅1.8cmの環状の節がある。2-2図は錫杖頭のみ示したもので、これも鉄製の6個の遊環は図から外してある。輪の横径は12.4cm、最大径が下方に下がった心葉形をなし、断面形が菱形で、柄との付着部から反転して鋭い蕨手形を造る。輪頂と輪内の柄の頂部に、先端に塔形を載せる宝瓶形が造り出されている。装飾が全くない簡素な造りで、鉄製である事とともに、このあと触れる男体山頂遺跡出土の錫杖頭に通ずる形態をもっている。10

## ② 正倉院蔵錫杖(挿図2-3・4・5)11

古代文物の規範とされている正倉院の蔵品に3点の錫杖がある。いずれも杖頭から石突きまで完存しているが、図では錫杖頭だけ示した。挿図2-3は伝勝道所用錫杖に酷似した作品で、総高が161.2cm、杖頭部の高さ20cm、全体が鉄の鍛造である。杖部には環状の節があり、下端に石突きが付けてある。錫杖頭の輪は角棒を曲げたもので、最大径が下方に下がる心葉形をなしている。輪頂は輪が接合されて尖り、塔形が削り出されている。輪は付着部で反転するが蕨手形とならず、先端が巻き込まれて双円形をなしている。輪内の柄は方柱となり、上部が尖る。この部分には細い横線が

刻まれていて、輪頂と同じような塔形を表現している。柄は下方の向けて太くなるが、装飾はない。

挿図2-4は総高が165.5cm、杖頭部は白銅製、杖部は鉄鍛造製である。錫杖頭の高さが33cm、輪は最大径がほぼ中央にある心葉形で、頂部は尖らず、柄との付着部で反転して蕨手形を造る。輪の断面形は菱形、外縁のほぼ中央の対称位置に鋭い金剛牙がつき、この上方に対称位の水瓶形を配する。輪頂に金剛牙を置き、この上に水瓶形とその前に小仏像を配する。仏手は右手が施無畏印、左手が触地印、像高は水瓶の約半分の高さがある。輪内の左右蕨手形の上には輪頂よりやや小ぶりの水瓶を置き、柄の上部は相輪形に造る。遊環は左右3個ずつの合計6個であるが、うち3個は後補とされている。杖部には上下2個所に環状の節を付ける。

挿図2-5は総高が174.8cm、杖頭部は白銅製で高さが21.1cm、杖部は鉄鍛造製である。杖頭部の輪は最大径がほぼ中央にある宝珠形をなし、頂部は尖ってこの上にインド風の小塔形を載せる。輪を蔓草で飾るが、葉の節の一は四王座に相当する部分である。輪と帯環が交互に重なる複雑な造りである。この錫杖は渡来品の可能性が説かれている。

以上3点のうち伝勝道所用品によく似た挿図2-3の錫杖は、出土品との対比のうで特に注意しておきたい資料である。

## 3) 錫杖の遍年基準

錫杖の編年については個々の蔵品や出土品について年代観を示した考察はあるが、資料総体を網羅した論考は極めて少ない。本稿では参照する文献としてやや古くはあるが、戦前の資料をほとんど網羅した香取秀真氏の労作『仏具・錫杖』を取り上げ、大要を以下のようにまとめておくことにする。12

### 1> 輪が円形ないし尖円形(宝珠形・心葉

形)のものは、奈良時代から平安時代初期に属する。

- 2 > 括りのある輪は平安時代末期から鎌倉時代以降に属する。
- 3 > 古式の錫杖は輪内の柄の先端に瓶形を置くことがあるが、多くは塔形を置き、左右の蕨手形の上に瓶形を置く。室町時代中期からは、左右が塔形に変化した。
- 4 > 古式の錫杖には、輪頂に宝珠形か瓶形を置いたものが多い。
- 5 > 4 >より古いものに、竜門や玉虫厨子の絵に見るような無装飾に近い錫杖がある。
- 6 > 輪の外側に金剛牙を置くが、ここは節や雲形になることがある。日月形を置くのは、平安時代末期から鎌倉時代以降と思われる。
- 7 > 柄の下部の袋部差し口が大きくなるのは、概して鎌倉時代以降である。

本稿では香取氏が取り扱われた資料よりも更に古く、また戦後の発掘調査で得られた多量の出土品を資料とするため、同氏が立てられた基準だけでは不十分であるので、以上を参考にしながら、形態の細分を行って行く。

### III. 各地の資料

#### 1 男体山頂遺跡出土の錫杖頭

栃木県日光市の男体山頂に祭祀に関係する山頂遺跡があり、大正13年と昭和34年の発掘調査で大量の遺物が出土した。この中に数多くの錫杖頭が含まれていて、従来の知見にはなかったものが存在している。発掘調査のあとも土砂の流失で遺物が発見されており、錫杖頭も出ている。これらを含めて現在までの全量を表示すると第1表のようになる。

出土年次	材料別・鉄	銅	合計
大正13年	0	1	1
昭和34年	20	14	34
その他	0	2	2

総計37

第1表

このほかに男体山開山の勝道を開基とする日光山輪王寺に、伝勝道所用錫杖とは別に2例の錫杖頭が保存されている。形態や古色の点で男体山頂遺跡出土のものと考えてよいが、残念なことに山頂出土の確証が無い。これらは輪王寺蔵の錫杖頭として、別個に取り扱うことにする。

昭和34年出土の34例については、報告書『日光男体山』のなかで、三宅敏之氏が以下のような4型式の分類を行っている。

第1型式 輪は宝珠形か心葉形、柄の先端が輪の外に突き出し、突き出した部分に宝珠形の刻み目を入れる。

第2型式 輪が空との接着部で反転して蕨手形をなすもので、出土品の大部分がこの型式に入る。柄の先端が輪の外に突き出すものがある。

第3型式 輪が柄に対して双輪になり、上下2個所の付着部のうち上の付着部から下に向かって蕨手形が下りるものである。

第4型式 輪が内側と外側の二重になったものである。

この分類で大要は尽くせるが、他例との対比にはさらに細部の仕分けが必要であるため、区分を新たにし、先述した香取秀真氏の基準を勘案して、出土品37例に対する分類を次のように行ってみた。

第1類 鉄棒に輪を着けただけの簡単な形態。棒の先端は突き抜けている。蕨手形は無い。

第2類 輪と柄の関係は第1類と同じで、柄



の先端は輪を突き抜けている。蕨手形を有する。

- a 柄の下部は挿入形。
- b 柄の下部は袋穂形。
- c 輪の取り付け方が上下逆になり、蕨手形も逆方向になる。

第3種 柄の先端が輪の中にある。先端が付着する場合と、輪から離れる場合とがある。蕨手形を有する。

- a 柄の下部が挿入形。
- b 柄の下部が袋穂形。
- c 柄の下部が袋穂形。輪に金剛牙、蕨手形に塔形・宝瓶形がつく。
- d 柄の下部が袋穂形。輪に金剛牙、蕨手形にも金剛牙がつく。
- e 柄の下部が袋穂形。輪に飛雲形がつく。
- f 柄の下部が袋穂形。輪と蕨手形に尊像・僧形がつく。

第4類 輪が大小にかかわらず二重になる。

- a 柄の下部が挿入形。二重輪になる。
- b 柄の下部が袋穂形。二重輪になる。
- c 柄の下部が袋穂形。内輪が双輪になる。

第1類 (挿図3-1・2) 。

1 先端が僅かに欠落している。現存高39.2cm、鉄製である。断面が矩形の鉄棒に宝珠形の輪を付けた簡素な造りの錫杖頭で、輪の下部は柄の面に付着し、上部は両側から柄の側面に付着し、そのまま伸びて柄の上端とともに輪頂を形成している。頂部には4条の刻線をめぐらし塔形を表している。柄の下端には段があって、柄と茎を区分している。

2 先端と輪の約半分が欠落し、柄の過半が欠けている。現存高24.4cm、鉄製である。輪と柄の接合は1と同じで、輪の最大径がやや上になっているほかは、形も似ている。先端の2条の刻線は、

欠落した塔形である。この錫杖頭には復元直径6cmの鉄環12個が付随している。

第2類 a (挿図3-3)

柄の先端と下部が欠落している。現存高13cm、鉄製である。断面が矩形の鉄棒に、断面菱形の輪を付けた簡素な造りで、蕨手形が大きい。柄下部が欠けているが、断面をみると挿入形である。

第2類 b (挿図3-4・5)

4 柄の上端下端と輪の一部が欠落している。現存高19.8cm、鉄製である。柄の上部は断面が矩形、下部は円形で袋穂形になっている。輪の断面は矩形、最大幅が下方にある心葉形をなし、左右が別体で両側から柄に付着している。一部に欠落が認められる柄の先端部には、塔形が刻まれているが、崩れて不明瞭である。蕨手形は大きく反転している。造りは簡素で、直径約5cmの鉄環が5個付随している。

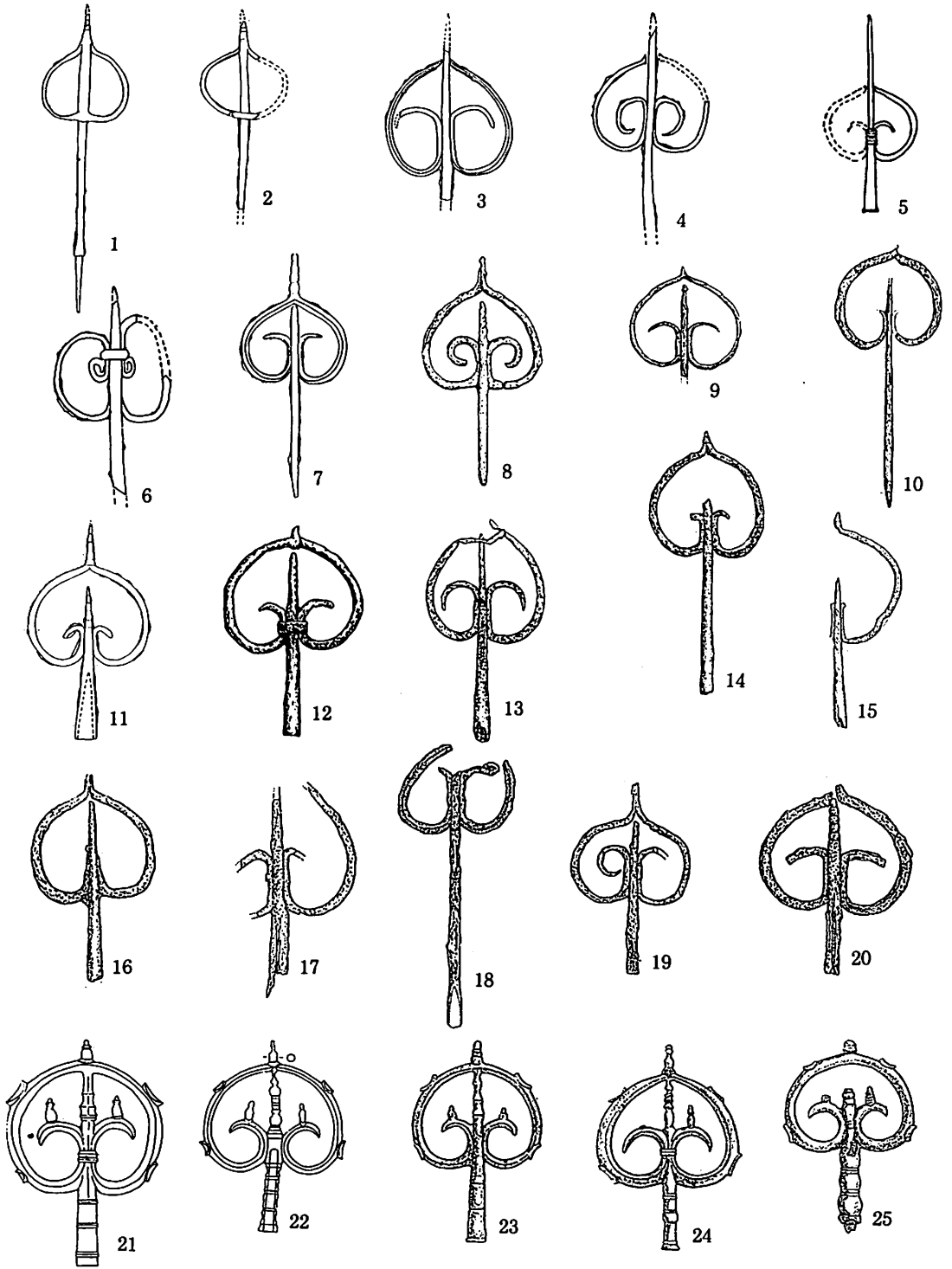
5 輪の半分が欠落している。現存高17cm、鉄製である。柄の上部が輪から著しく上に伸び、次第に細くなって上端に球形がつく。球形は恐らく宝珠形であろう。柄の下部は円形の袋穂形で、下端が返って玉縁をなしている。輪の断面は菱形、左右が別体に造られ、4条の太めの鉄線により、蕨手形の部分で柄に固縛されている。蕨手形の返りは普通で、先端が尖る。

第2類 c (挿図3-6)

柄の上下と片方の輪の一部が欠落している。現存高18.6cm、鉄製である。柄の上方は断面が矩形、下方は円形で中空、先端に向かって細くなり、輪の外に突き出す。輪は左右別体で片方が大きく、不整楕円形の輪形は均斉でない。通常の輪とは逆に下方から出て上方で鉄環により固縛され、反転して蕨手形を造るが、蕨手形は巻き込まれて小さい楕円形となっている。遊環は12個付随している。

第3類 a (挿図3-7~10)

7 柄の先端が輪の中にある形態で、蕨手形を



挿図3 各地錫杖頭

8~10、12~20、23~25『日光男体山』より引用（縮尺不同）

有し、柄の下端は挿入形である。完形で総高が19.7cm、鉄製で装飾が無く、造りが明快単純である。柄の上部の断面は円形、下部は方形、輪は同体の造りで心葉形をなし、断面は方形、輪頂に5段の塔形を刻む。

8 完形に近く、現存高25cm、鉄製である。柄の断面は円形、下部は挿入形、上端に6段の塔形を刻む。輪は左右別体の造りで上部で合わせり、心葉形をなす。蕨手形は反りが大きく、左右均斉でない。遊環2個が付随している。

9 柄の下半部が欠落している。現存高11.8cm、鉄製である。柄の断面は円形、先端に2段の塔形を刻む。輪の断面は楕円形、造りが細く、最大幅がやや上にくる宝珠形をなし、輪頂は短く細く尖っている。蕨手形の開きが大きい。全体に華奢な造りである。

10 輪も柄も欠落が目立つ。現存高27.9cm、鉄製である。柄の断面は矩形、下方が太くなる。上端が欠落しているが、柄が輪内に留まることは確実である。輪の断面が長方形で、全体が平たい環状となり、円形に近い宝珠形をしている。輪頂は尖るが、先端が欠けているため、この造りは不明である。蕨手形もほとんど欠落しているため、やはり造りが分からない。遊環1個が付随している。

### 第3類 b (挿図3-11~20)

11 輪頂の先端がすこし欠けただけで、完形に近い。現存高19.5cm、鉄製で遺存の状態はかなり良い。輪は宝珠形で、断面方形の輪頂に5段の塔形が刻んである。柄は短く、下に向かって急に太くなり、下部は断面円形の袋穂形に造る。柄の先端に同じく5段の塔形を刻む。蕨手形は小さく、先端の造りは鈍い。

12 輪頂が少し欠けただけで、完形に近い。現存高15cm、鉄製である。輪の断面は方形、ややゆがんだ宝珠形で、輪頂は尖るようである。柄の断面は円形、先端の刻みは判然としない。下部は袋穂形である。蕨手形は左右不均斉で、柄との付着

部に幅約1cmの縛があり、輪と柄を固縛している。環は残片が残っている。

13 現存高21cm、鉄製である。輪頂と柄の下端が崩れている。輪の断面は平たい矩形で、最大径が下がった位置にある心葉形をなし、輪頂で接合する。柄の上部の断面は矩形、下部は袋穂形である。先端は尖り、刻みはみられない。蕨手形は付着部が長く、反転が大きく、先端が尖る。遊環6個が付随している。

14 輪内の部位に欠落が多い。現存高24.7cm、鉄製である。輪の断面は矩形、ややゆがんだ宝珠形をなし、輪頂は短く尖っている。柄は断面が円形、上部は欠落して形が不明、下部は細い袋穂形である。蕨手形は付着部が長く、反転が小さい。輪の形からみて、柄の先端は輪の中にあると考えてよい。

15 欠落部分が多い。現存高23cm、鉄製である。輪の断面は矩形、下がすばまった宝珠形をなし、輪頂は短く尖り、刻みはみられない。輪の下方に括りに似た凹みがあるが、外圧や腐食による変形である。柄の上部の断面は平たい矩形、下部は袋穂形である。先端は尖り、刻みはない。蕨手形は形が不明、付着部はかなり長い。

16 蕨手形が欠けている。現存高16.2cm、鉄製である。輪の断面は平たい矩形、最大幅が中央付近になる宝珠形である。左右別体で輪頂で合わせる。輪頂は短く、刻みはない。柄の上部の断面は矩形、下部は断面が楕円形の袋穂形である。柄は先端に向かって細くなり、輪内にとどまる。先端に刻みはない。

17 欠落・損傷が著しい。現存高15.8cm、鉄製である。輪の断面は方形に近い矩形で、心葉形をなすとみられる。柄の上部の断面は矩形、下部は円形の袋穂形である。上に向かって細くなる。蕨手形の形は不明確であるが、反転は大き目のようである。付着部は長い。柄の先端が輪の外に出るか輪内にとどまるか判然としないが、13に似た形

態とみて、一応第3類bに区分しておく。

18 柄の下部が長く、輪を含む上部がかなり損傷変形している。現存高22.8cm、鉄製品である。輪の断面は矩形、心葉形をなすようである。輪頂の形は不明である。柄の上部の断面矩形、下部は円形の袋穂形である。蕨手形の形は不明確であるが、在存部の様子からみて先端は横に伸びるようである。輪と柄の先端の関係が17と同じように判然としないが、一応第3類bに区分し検討を重ねたい。

19 現存高15.2cm、鉄製である。輪の断面は不整円形、平たい宝珠形である。輪頂は細長く、先端が欠ける。この部分の刻みは不明。柄の上部の断面は矩形、下部は円形の袋穂形である。蕨手形は反転が大きく、ほとんど円形に近くなる。付着部は長い。

20 現存高15.3cm、鉄製である。柄の先端が輪に食い込んでいるが、この部分の造りからみて、輪のゆがみとみてよい。輪の断面は矩形、最大径がやや下がった心葉形をなす。輪頂が欠落している。柄の上部の断面は円形、下部は円形の袋穂形である。先端に5段の塔形を刻む。蕨手形は左右に広がる形であり、付着部は長い。遊環6個が付随している。

### 第3類c（挿図3-21～25、挿図4-26）

第3類cからfまでは基本的形態が同じであるが、錫杖頭を荘厳する装飾が各種付加されるもので、鋳型を用いて造形した銅製品が主体になる。

21 総高17.3cm、銅製である。輪の断面は鋭い菱形で、匙面をなしている。最大幅がほぼ中央になる宝珠形で、外縁の対称位の四王座に金剛牙がつく。上の2個が大きく、下の2個が小さい。金剛牙の上面は匙面をなし、輪頂に宝瓶形を置く。柄は輪との付着部から上の断面が菱形になり、稜が立つ。蕨手形から上の部分は稜の突出によって塔形を表し、上端は輪の内縁に接続する。柄の下部は2条一組の細い環帯が3箇所めぐり、この

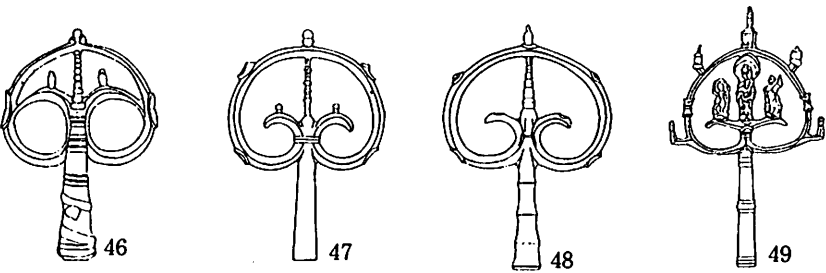
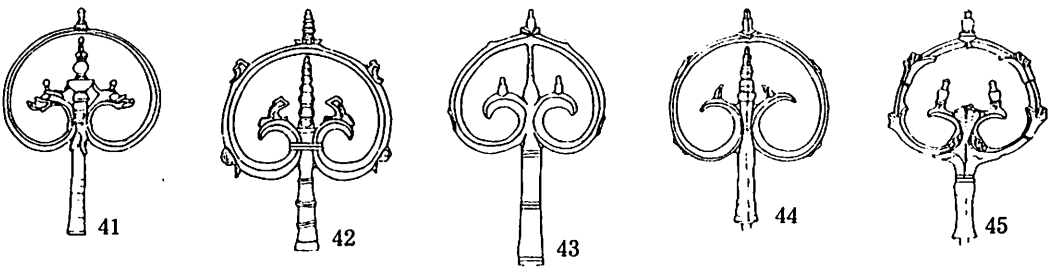
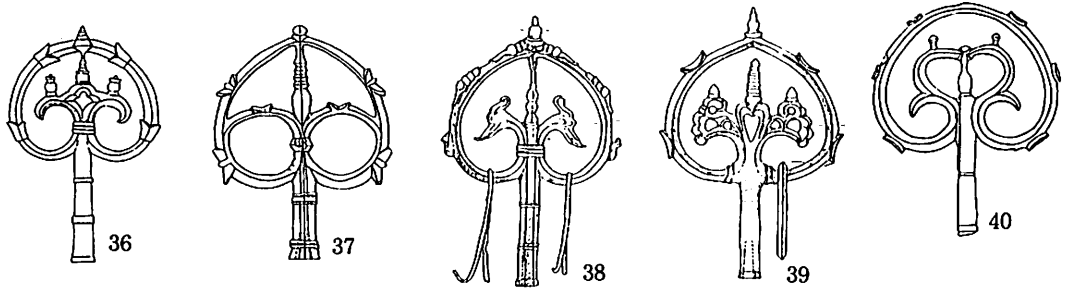
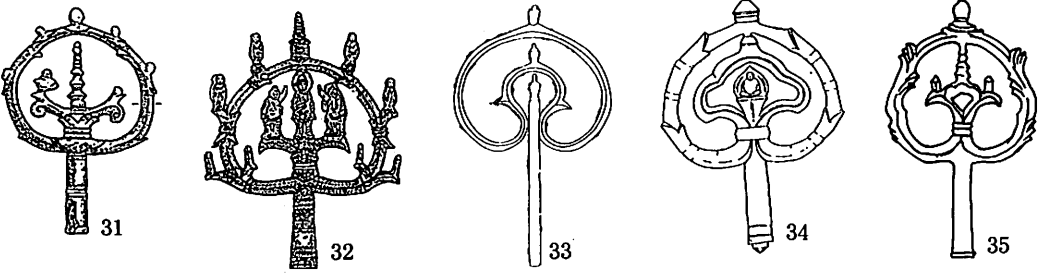
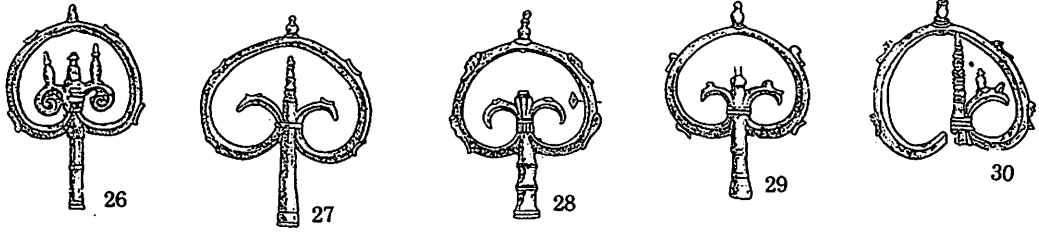
部分が袋穂形になっている。蕨手形は付着部の中央に2条の稜の立つ隆帯をまわし、反転した蕨手の上縁に宝瓶形を置いている。

22 図示の通り柄の軸線がゆがんでいる。総高14.8cm、銅製で鋳上りが良くない。輪の断面は平たい菱形で、宝珠形をなしている。四王座に金剛牙を配する。金剛牙は上の2個が小さく、下の2個は大きい。輪頂に宝瓶形を置く。柄の上部は塔形、下部は竹管形になり、沈刻線3条で節を表している。袋穂形で、下端はやや張り出す。蕨手形は鋭く反転し、上縁に宝瓶形を置いている。

23 総高16cm、銅製である。輪の断面は鋭い菱形で宝珠形をなしている。四王座に金剛牙を配する。金剛牙は上の2個が小さく、下の2個は大きい。輪頂に宝瓶形を置く。柄は断面が円形、上部下部とも竹管形に造られている。柄の上端は輪の内側に接し、下部は袋穂形である。蕨手形に宝瓶形を置く。全体が鋭さを欠く造りである。

24 総高17.1cm、銅製である。輪の断面は一方が尖る菱形、最大幅が下がった心葉形をなし、四王座に金剛牙を配する。金剛牙の造りが退化していて、低く鈍い。上の2個が小さく、下の2個は大きいのは上例と同じである。輪頂に座を付した宝瓶形を置く。柄は断面が円形、上部は宝塔形をなし、下部は2条と1条の隆線できくる。袋穂形である。蕨手形は付着部の中央を2条の縛でくくり、上縁に宝瓶形を置くが、一方は欠落している。

25 ずんぐりした鋭い造りの錫杖頭である。総高15.5cm、銅製である。輪の断面は円形で、宝珠形をなしている。四王座に退化した低い金剛牙を置く。輪頂に置かれた突起は、合子形か塔形か判然としない。柄の断面は円形、上部は塔形と思われるが半分が欠落している。下部は2条の隆線できくる。袋穂形で、杖部の木質が残っている。蕨手形の付着部の中央に細い条線3本を描き、くくりの痕跡を示している。上縁に崩れた塔形を置くが、1個は大部分が欠落している。



挿図4 各地錫杖頭

26~32『日光男体山』より引用(縮尺不同)

26 総高15cm、銅製である。輪の断面は平たい菱形で、ゆがんだ宝珠形をなしている。四王座に退化した低い金剛牙を置く。輪頂に塔とも瓶ともつかない、崩れた突起を置く。柄の断面は円形、先端に塔形を置くが、先が欠落している。下部には上下2条、中央1条の隆帯がめぐる。袋穂形である。蕨手形の付着部に崩れた縛があり、鋳流れのある蕨手は渦巻き状になっている。上縁に崩れた塔形を置くが、1個は上端が欠落している。

第3類 d (挿図4-27)

27 総高15.6cm、銅製である。輪の断面は鋭い菱形で、宝珠形をなしている。四王座に退化した低い金剛牙を置く。輪頂に宝瓶形を置く。柄の断面は円形、上部は塔形に造り、下部は棒状で下端に隆帯をつける。袋穂形である。蕨手形の付着部に1条の縛をめぐらし、蕨手の上に金剛牙を置く。この部分が通常のものとは異なる。

第3類 e (挿図4-28~31)

28 輪に飛雲形を置く錫杖頭である。総高15.4cm、銅製である。輪の断面は稜がたつが少々崩れた不整菱形、全体は最大径がやや下がった宝珠形をなしている。四王座に退化した飛雲形を配し、輪頂に宝瓶形を置く。柄の断面は円形で上部は大部分が欠落、下部は竹管形に造られている。袋穂形である。蕨手形の付着部に2条の隆線できくった蓮弁が付き、蕨手の上縁に著しく退化した飛雲形を置く。

29 総高14.6cm、銅製である。輪の断面は崩れた不整菱形、全体は宝珠形をなしている。四王座は上2個が退化した飛雲形、下2個がこれも退化した金剛牙になっている。輪頂に宝瓶形を置く。柄は断面形が円形、輪との付着部には2条の縛をめぐらし、上は基部のみで、塔形と思われるものの大部分が欠落している。下部には2条の隆帯があり、袋穂形である。蕨手形の先端は鋭いが、蕨手上縁に置かれた飛雲形は著しく退化して塊状になっている。

30 欠落が多くゆがんでいる。現存高10.8cm、銅製である。輪の断面は菱形、全体は宝珠形をなし、輪頂に座をつけた宝瓶形を置く。四王座に少々退化した飛雲形を配する。柄の上部の断面は円形、細長い層塔形を置くが、芯から外れてゆがんでいる。柄の下部は欠落している。蕨手形は付着部に3条の縛をめぐらし、片方のみ残存している蕨手の上縁に金剛牙を置き、さらに牙の柄寄りのはしに宝瓶形が立ててある。

31 柄の下部に欠損があるが、ほぼ完形である。総高16.2cm、銅製である。輪の断面は不整菱形、全体は宝珠形をなし、輪頂に宝珠形を置く。四王座の位置は上方に偏し、著しく崩れた飛雲形が配されている。柄の断面は円形、上端は層塔形、下部は2箇所2条一組の条線をめぐらし、下縁は玉縁になっている。蕨手形は、付着部の基部に2条の縛をめぐらす。蕨手は上下2段に分かれ、下方は下に向かって渦巻き状に巻き、上方は両端が牙状に突き出し、この上に塊状の突起をつける。牙状のものは上例で見たように、蕨手の上縁につけられた金剛牙が左右一体になった形とも考えられ、この上の塊状突起は前例30のように、金剛牙と組む退化した塔形とみなすことができるかもしれない。

第3類 f (挿図4-32)

32 壮嚴が著しい特殊な錫杖頭であるが、尊像・僧形・牙などの付随物を取り除くと、基本的にはこの類に入る作品である。総高18.7cm、銅製である。輪の断面は鋭い菱形で、全体は宝珠形、外縁の四王座の位置に、両面から見る僧形を配し、この下方の2座すなわち梵天・帝釈天の座に二股に分れた金剛牙をつけ、さらに牙の上に碑伝に似た塔形を置く。輪頂に相輪をつけた六面塔を載せる。柄の断面は円形、輪に接した上部に両面から見る如来像1軀(片面からみた場合)を置き、この左右に、これも両面から見る天部像を1軀ずつ蕨手上縁に配置する。柄の下部には条線と沈刻の装飾

が施され、輪との付着部に2条の隆線で扼した花弁状の装飾がある。輪や蕨手形には、随所に魚子と細線の装飾が施されている。

第4類 a (挿図4-33)

33 内輪を有するものである。総高22cm、鉄製である。輪の断面は鋭い菱形、外輪と内輪の輪頂にそれぞれ宝瓶形を置き、内輪の下方の対称位置に鋭い金剛牙をつける。柄の断面は円形、全体が棒状で、先端に宝瓶形をつけ、下部は挿入形である。遊環が4個付随している。頂部の宝瓶形は3個は縦に並び、他の例と異なる。

第4類 b (挿図4-34~36)

34 総高14.6cm、銅製である。外輪の断面は円形、四王座の位置に蔓草がつけられ、その間に節が2箇所ずつ刻まれている。輪頂に塔形を置く。内輪の断面は不整菱形で、輪頂に短い塔形を置き、先端は外輪の内縁に接している。柄の断面は円形、上部は内輪の中に出て、この上に宝珠形光背の仏形座像が蓮華座に座している。柄の下部は丸棒で、下端近くに2条の線を刻み、袋穂形になっている。この中に杖部の木質が残っている。

35 総高18.6cm、銅製で、内輪が非常に小さい錫杖頭である。外輪の断面は不整六角形ををなし、全体は宝珠形に造られているが、下部に2箇所の括りが見られる。この括りとその上部2箇所、すなわち四王座の位置に蔓草がつけられ、一部は輪の内側に突き出している。輪頂に宝珠形を置く。内輪は柄の上部の塔形基部と、左右の蕨手形との間にできた小形の透かしで、前二者と造りが異なる。蕨手の上縁に碑伝形の塔形を立て、中央と合わせて3塔が並ぶ。蕨手形の付着部に2条の隆帯をめぐらし、柄の下部は下に広がる棒状になり、下端がふくらんで袋穂形になっている。

36 総高16.2cm、銅製である。形態は前例35に類似し、柄の上部に小さい内輪をつける。外輪の断面は菱形、四王座の節の位置に蔓草がつけられ、輪頂に塔形を載せる。内輪は柄の上部と蕨手形の

基部で構成され、下の尖った格狭間形の透かしがある。蕨手の上縁に宝瓶形を立てる。蕨手形の付着部に3条の縛をめぐらし、柄の下部にも3条の隆帯がある。この断面は円形で、袋穂形になっている。

第4類 c (挿図4-37)

37 内輪が双輪になった形態である。総高13.9cm、銅製である。外輪の断面は三角形、全体は最大幅が下がった位置になる心葉形で、四王座に括りのある金剛牙を配し、輪頂に座をもつ宝珠形を載せる。内輪は蕨手形が左右に伸びて外輪に接した形で双輪になり、付着部をはさんで円形に近い不整円形を造る。付着部に稜のある環帯の縛をめぐらし、双輪の部項に金剛牙を置く。柄の断面は上部が円形で塔形に作り、下部が六角形で2箇所に1条と2条の隆帯をめぐらす。袋穂形である。

以上が男体山頂遺跡出土の錫杖頭37例の要約であるが、このあとの資料にも関係する錫杖頭の素材について、37例の区分を述べておきたい。錫杖頭の素材は鉄か銅に限られる。鉄製は鍛造であるが、銅製は可塑性に富む鋳造で、銅製品の複雑な

区 分	鉄 製	銅 製
第1類	2	0
第2類 a	1	0
b	2	0
c	1	0
第3類 a	4	0
b	10	0
c	0	6
d	0	1
e	0	4
f	0	1
第4類 a	1	0
b	0	3
c	0	1
合 計	21	16

第2表

造形は図示の通りである。こうした素材の選択がどの形態の錫杖頭から行われているか、ひとつの目安を第2表で示してみようと思う。

この表により、第1類と第2類には銅製錫杖頭が全くなく第3類以下に集中し、特に第3類c・eと第4類bにまとまりがあること、鉄製錫杖頭は銅製錫杖頭とは逆に第1類・第2類にあり、特に第3類a・bに形態上の集中がみられることなど、かなり際立った相違が認められる。

## 2 日光山輪王蔵錫杖頭(挿図4-38・39) 16

輪王寺の伝世品で、男体山頂の出土と考えられている。山頂遺跡出土品と比較すると、腐朽度・色調・形態などの点が類似しており、山頂出土は恐らく間違いないものと思われる。

38 本例は「鳳首飾り錫杖」とよばれているもので、総高17.8cm、銅製である。輪の断面は菱形、全体は最大径が下がった宝珠形で、四王座に飛雲形を置くが下の2個は形が崩れている。輪頂には左右に飛雲形を伴う宝瓶形を載せる。柄の上部は塔形に造られ、先端は輪の内縁に接している。下部は不整八角柱で、2箇所に2条一組の隆帯がめぐり、下端が玉縁になっている。袋穂形である。蕨手形は先端をT字形に伸ばし、ここを鳳の首形に造っている。遊環が2個付随している。男体山頂遺跡の出土品には鳳首の蕨手形はないが、四王座に飛雲形を置き蕨手形を変形させた錫杖頭は存在する。本例はこの仲間とみなしてよい。

39 本例は「雲文飾り錫杖」とよばれているもので、総高17.7cm、銅製である。輪の断面は菱形、全体は最大径が下がった宝珠形で、四王座に金剛牙を配する。輪頂に宝瓶形を置く。柄の上部は蕨手形と一体になって心葉形の内輪を構成し、上に相輪形を置く。柄の下部は円形の棒状で、下端は隆線を伴う玉縁になり、袋穂形である。蕨手形は先端が平たく透かしのある雲形になり、上縁に座をもつ宝珠形を載せる。男体山頂遺跡の出土品に

は雲文の蕨手形はないが、柄と蕨手形によって小形の内輪を構成する例はあり、本例はこの仲間と考えてよい。

## 3 剣岳山頂出土錫杖頭(挿図4-40) 16

富山県中新川郡立山町と上市町に跨がる北アルプス立山連峰の剣岳山頂で、柴崎測量官一行によって発見された遺物である。輪頂と柄の下端がすこし欠けている。現存高13.4cm、銅製である。内輪のある仲間で、外輪の断面は菱形、全体は宝珠形をなし、四王座と梵天・帝釈天座の6箇所に金剛牙を配する。内輪は柄の上部の宝瓶形先端と蕨手形基部を結ぶ心葉形に造られ、上縁の対称位に柄をつけた宝珠形を置く。蕨手形の反りは大きい。柄の下部は中央と下端に条線がめぐり、袋穂形である。

## 4 大日岳山頂出土錫杖頭(挿図4-41) 17

同じ立山連峰の大日岳山頂で発見された。大日岳は奥大日岳・中大日岳・大日岳の3山に分かれ、剣岳同様古い信仰の山であるが、錫杖頭の出土地点に諸説があって、正確な位置は不明である。総高17cm、銅製である。輪は円形に近い宝珠形をなし、輪頂に宝瓶形を立てる。金剛牙は無い。柄の上部は蓮華座を置いた塔形で、先端は輪内にある。付着部の下に蓮弁を配し、下部は竹管様の節を刻み、下端は玉縁で、袋穂形になっている。蕨手形の付着部中央に尖った隆線をめぐらし、蕨手は反転の形なりに竜首形に造る。竜の角と柄上部の塔形蓮華座とは接触しており、この間が透かしになっていて、菱形の小さい双輪が造り出されている。

## 5 那智山出土錫杖頭(挿図4-42) 16

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町にある那智滝正面手前の参道脇で発見された。経塚遺物と一緒に採取されたため経塚の伴納品と誤解する向きがあるが、経塚造営の時代よりも遙かに古い時期の遺物である。総高17.6cm、銅製である。輪は断面が菱形、全体は円形に近い宝珠形をなし、輪頂に雲形



台座をもつ塔形を置く。四王座にやや崩れた飛雲形を配する。柄の断面は円形、上部は相輪をもつ塔形、下部には2条一組の隆線を3段にめぐらし、下端が玉縁になる。袋穂形になっている。蕨手形の付着部に2条の縛を入れ、蕨手の湾曲を巧みに使って上縁を鳳首に造る。遊環が6個付属している。装飾の構成は輪王寺蔵「鳳首飾り錫杖」によく似ている。

#### 6 信夫山出土錫杖頭（挿図4-43）

福島県福島市の中心部にある地塊の信夫山山頂部で発見されたもので、火舎・六器・花瓶など一括遺物のひとつである。総高15cm、銅製である。輪の断面は菱形、四王座の上2個は退化した飛雲形、下2個は退化した金剛牙で、輪頂に宝瓶形を置く。柄の断面は円形、上部は崩れてはいるが相輪を持つ塔形で、先端は輪の内縁に接している。下部は2箇所に2条一組の隆線をめぐらし、下端は玉縁になっている。袋穂形である。蕨手形はやや幅広で造りが鋭く、上縁に宝瓶形を置く。直径の小さい環が2個付随している。

#### 7 法隆寺蕨錫杖頭（挿図4-44・45）

2例とも法隆寺に伝世した錫杖頭で、杖部を装着した錫杖全体が残っている。天平19年（747）『法隆寺縁起資財帳』に「合錫杖式枚 弥勒仏分壹枝・長五尺一寸五分 観世音菩薩分壹枝」とあるが、この2例である。

44 「弥勒仏分壹枝・長五尺一寸五分」と記録された錫杖で、錫杖の総高は152.5cm、錫杖頭だけの高さ16.4cm、銅製である。輪は円形に近く、四王座に退化した金剛牙を配し、輪頂に宝瓶形を置く。柄は上部が塔形、下部が竹管状に造られ、袋穂形である。蕨手形は付着部に2条の縛の痕を残し、蕨手の上縁に内傾した宝瓶形を立てる。奈良時代の製作が明瞭な錫杖であるが、造りに退化が認められる。

45 「観世音菩薩分壹枝」とある方の錫杖である。錫杖の総高は161.25cm、錫杖頭だけの高さ18.

5cm、銅製である。輪の断面は菱形、全体は円形に近い宝珠形で蔓草をかたちどる。四王座の位置に節を置き、葉端が輪の内外に突き出す。輪頂に宝瓶形を立てる。柄の上部は欠落し、この下が花弁状に開く。下部は太い竹管状で1箇所に節がみられる。蕨手形は花弁状の柄に添って反転するが、反りは浅い。蕨手の上縁に内傾した宝瓶形を立てる。前例44に比べて複雑に壮厳してあるが、基本的な構図は同じと考えてよい。

#### 8 浄住寺蕨錫杖頭（挿図4-46）

京都市の浄住寺蔵品で、鑑真和上の将来という寺伝がある。内輪が双輪になったもので、総高13cm、銅製である。外輪は円形に近い宝珠形で、内輪との接点に近い外縁にふたつの金剛牙を配する。輪頂に宝珠形を置く。柄の上部は細い塔形で、この下の付着部と柄の下部は太くなり、付着部には2箇所に縛を入れ、同じ形の隆帯が角型の柄の下部を斜行して下端で水平になる。袋穂形である。蕨手形は太く、先端が外輪の内縁に接してほぼ円形の双輪を形成する。双輪の上縁に宝瓶形を立てる。どの部分も造りが太く、頑丈な造りの錫杖頭である。遊環が6個付随している。

#### 9 中尊寺蕨錫杖頭（挿図4-47）

岩手県西磐井郡平泉町にある中尊寺の什物とされている。総高14.6cm、銅製である。輪の断面は菱形、全体は円形に近い宝珠形で、四王座の上2個が退化した飛雲形、下2個が低い金剛牙になっている。輪頂に宝珠形を置く。柄の上部の断面は円形で塔形になり、下部は六角で下に向かって太くなる。3箇所に2条一組の隆線が入り、袋穂形である。付着部中央に2条一組の縛を入れ、鈍い蕨手形が反る。蕨手の上縁に宝瓶形を立てる。

#### 10 香取氏蕨錫杖頭（挿図4-48）

香取秀真氏の個人蔵品で、同氏の著書に載録されている。総高13.7cm、銅製である。輪は断面が菱形、全体はやや平たい宝珠形をなし、輪頂に宝瓶形を立てる。四王座の上2個が座をもつ退化し

た宝珠形、下2個が低い金剛牙になっている。柄の上部は先端が輪の内縁に接する古式の塔形、下部が竹管状になり、袋穂形である。蕨手形の反りは浅く、上縁を削って金剛牙を造りだしている。

#### 11 松田氏蕨錫杖頭(挿図4-49)

松田光氏の個人蔵品で、総高21cm、銅製である。挿図4-32に示した男体山頂遺跡出土錫杖頭と同巧の荘厳が著しい作品である。輪の断面は菱形、全体は最大径が下がった心葉形をなし、輪頂に相輪を伴う塔形を置く。四王座の上2個に柄をつけた塔形、下2個に中央を扼した金剛牙を上下二重につけ、梵天・帝釈天座に鍵状の柄をつけた塔形を立てる。柄の上部は光背をもつ如来像で、先端は輪の内縁に接している。平たく伸びた蕨手形の上に天部の像を立る。付着部は3条の縛があり、柄の下部は中央に子持ち紐を、上下には隆帯をめぐらし、下端は玉縁に造る。袋穂形である。

### IV. 古式錫杖の形態的系譜と鉄製錫杖

#### 1 男体山頂遺跡出土以外の錫杖の分類

以上までで、基礎資料とした4例を加え、総数53例の錫杖ないし錫杖頭を瞥見してきた。男体山出土の錫杖頭に37例については、個別の説明の前に4類の大別と、類の中の細分を示して、この順序に従い出土した各例の大要を述べた。山頂出土の37例を除く16例も、およそこの分類基準で対応できると考えるが、その前に、分類に合わせて山頂出土の37例から模式となるような錫杖頭を選択し、これを挿図5に示し一覧してみようと思う。

第1類は1と2の2例であるが、2は柄の挿入部を欠くため1を模式とした。第2類aは3の1例だけである。3の説明の項で触れたが、柄の下部は欠けている。ただし欠落部分の断面が1・2と同じであり、袋穂形になっている第2類bは4と5の2例であるが、輪の半分を欠失しているものの、5がこの類の特徴をよく示しているために、

これを模式とした。第2類cは6のみ1例の出土であり、これを模式とした。輪や蕨手形の装着が全く逆であり、希少な例であるとともに、同例の発見を期待したい錫杖頭である。

第3類aは7・8・9・10の4例であるが、完形でありこの類の特徴をよく示している7を模式とした。第3類bは数が多く、11・12・13・14・15・16・17・18・19・20の10例に達し、山頂出土錫杖頭の中では最多の類になる。この中から完形であり、最も整美な形の11を模式に選んだ。第3類cには鉄製がなく、21・22・23・24・25・26の6例全てが銅製である。これは先に表示した通りで、銅製錫杖頭の出現を考える上でのひとつの目安になる。この類には完形または完形に近いものが多いが、この中から21を模式に選んだ。第3類dは第3類cの僅かな異形で、27の1例しかない。第3類eは28・29・30・31の4例である。輪の四王座に飛雲形を配する類で、31のみが完形であるが、飛雲形が退化し崩れていて、類の特徴を示す例としては適当でない。柄の上部を欠く欠損品であるが、28を模式に選んだ。第3類fは荘厳過剰な類で、これは32の1例しかない。

第4類aは内輪のある類のひとつで、33の鉄製1例しかない。第4類bは34・35・36の3例で、どれも完形品であり、かつ優美な錫杖頭であるが、この中から34を選んで模式とした。第4類cは双輪の類で、37の1例しかない。

男体山頂出土錫杖頭の分類に準拠し、山頂出土以外の16例を区分してみたものが挿図6である。鉄製である第1類と第2類a・b・cに分類されるものが皆無であることは、まず第一に注意しておかなければならない。この手の錫杖頭の存在は、今のところ男体山頂のみに限られている。基本資料とした4例の錫杖のうち、伝勝道所用の1と正倉院3の2例は、柄の先端が輪を突き抜けてはならず、蕨手形があり、柄が杖部に対し挿入形である点を見て第3類aとした。同じ形態であって柄

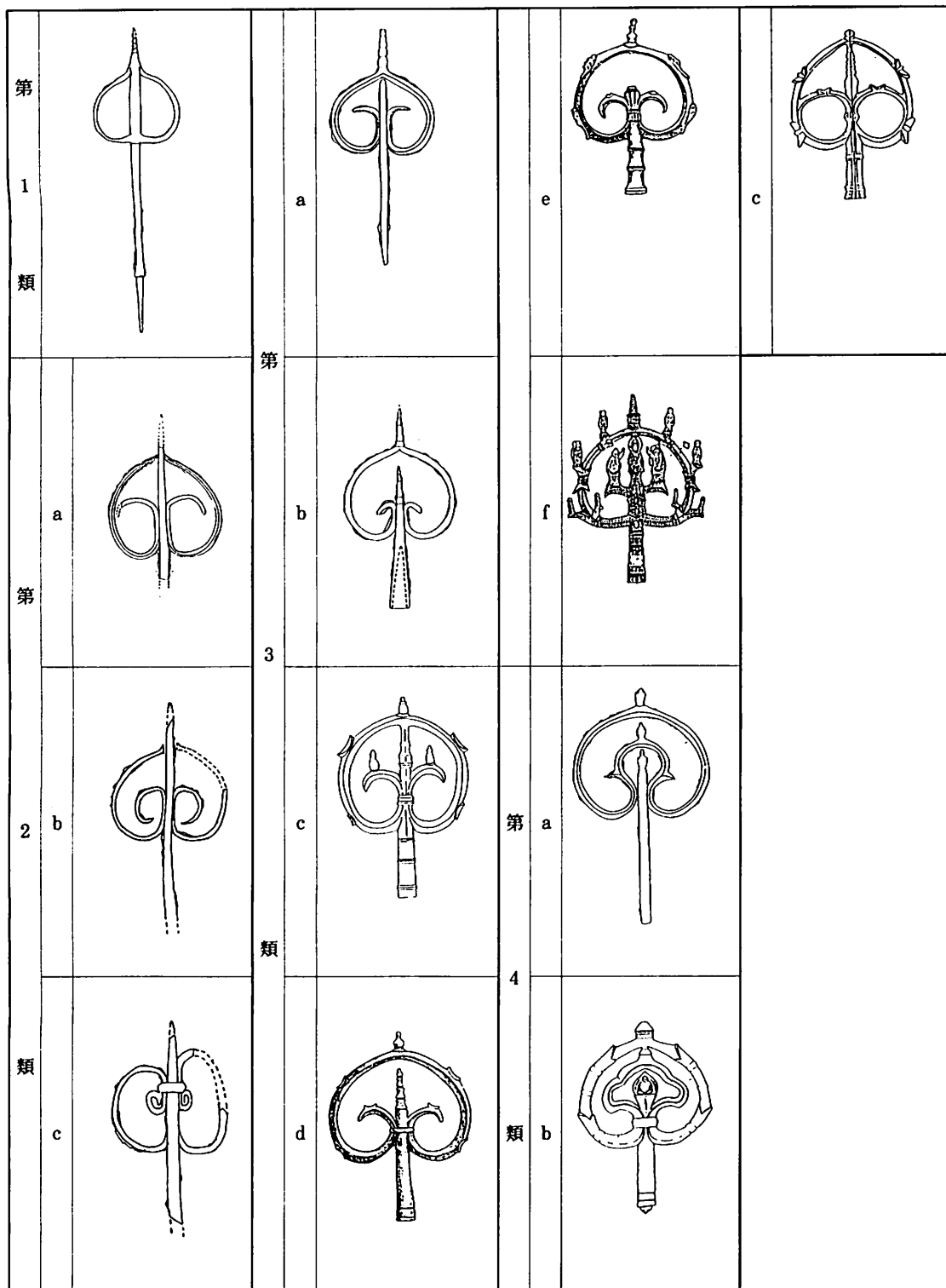
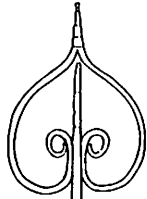


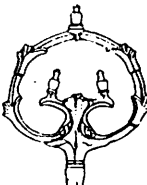
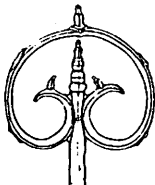
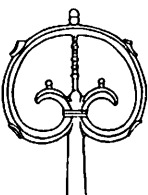
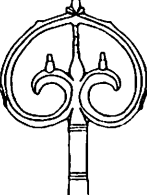
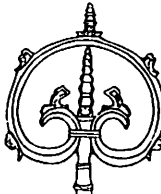

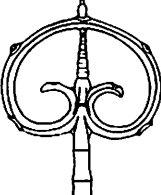

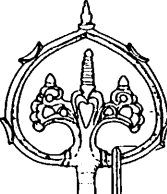
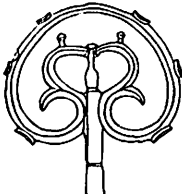
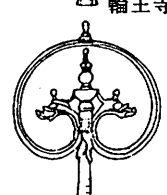




插图 5 男体山顶遗迹出土锡杖头分类图 (缩尺不同)

第1類		第2類		第 3 類				
	a	b	c	a	b	c		d
0	0	0	0	 正倉院 3   勝道 1	0	 正倉院 4   法隆寺 45   法隆寺 44   中尊寺 47   信夫山 43	0	
第 4 類								
e				f		a	b	
 那智山 42   輪王寺 38   香取氏 48				 松田氏 49		0	 輪王寺 39   劍岳 40   大日岳 41   正倉院 5	
c								
 淨住寺 46								

挿図 6 各地錫杖頭分類図(縮尺不同)

の下部が袋穂形になる第3類bは、16例の中にはない。銅製錫杖頭として6例が集中していた山頂出土品と同じく、第3類cには16例中5例の集中がみられる。この類は柄の下部が袋穂形、輪と蕨手形に金剛牙を配するもので正倉院4、法隆寺45・同46、中尊寺47、信夫山43の5例がこれに入る。第3類dはcに似た形態であるが、輪のほかに蕨手形にも金剛牙を配するもので、山頂品に1例みられるが、山頂出土以外の16例の中にはない。

第3類eは蕨手形があり、柄の下部が袋穂形になっていることは同じで、輪に飛雲形が配されている。山頂出土品には4例があり、以外の16例中には3例がみられる。著名な那智山の錫杖頭42は輪の四王座に飛雲形をつけ、輪王寺38もやはり四王座に飛雲形を配する。飛雲形をつける38と42が、ともに鳳首飾りの蕨手形に造られ点は興味深い。第3類fは荘厳過剰な錫杖頭で、山頂出土品に1例あり、16例中にも松田氏蔵49の1例がある。両者とも仏像の持ち物で、実用の錫杖に装着された錫杖頭ではないように思われる。第4類aは輪が二重輪になり、柄の下部が挿入形をとる類であるが、山頂出土品に鉄製1例があるのみで、16例中にはみられない。第4類bは柄の下部が袋穂形になるもので、山頂出土品に3例あり、16例中には4例がみられる。輪王寺39、剣岳40、大日岳41、正倉院5がそれである。しかし剣岳40は或はつぎの双輪の類に入れるのが正しいかもしれないし、山頂出土品34と内輪が小さい透かしになった35・36、輪王寺39、大日岳41、正倉院5などは、別の類に区分するのが適当であるかもしれない。これは第4類aが鉄製の1例にすぎないことと関連して、詳細に検討してみたい。第4類aは双輪の類で山頂出土品に1例あり、16例中では浄住寺46がこれに相当する。

錫杖頭は素材の違いにより大きな偏りのあることが、男体山頂出土品の仕分けで明らかになっている。つまり鉄製か銅製かということで、形態に

差異が生じるわけである。16例についても同様な偏りが認められるかどうか、以下第3表によって確かめてみよう。

区 分	鉄 製	銅 製
第1類	0	0
第2類 a	0	0
b	0	0
c	0	0
第3類 a	2	0
b	0	0
c	0	5
d	0	0
e	0	3
f	0	1
第4類 a	0	0
b	0	4
c	0	1
合 計	2	14

第3表

この表でみると、鉄製品は第3類に2例あるだけで他には全くなく、銅製品は男体山頂出土品と同様、第3類c以下に集中がみられ。素材による作品の偏りは、男体山以外の16例の中にも明瞭に認められるわけである。

## 2 鉄製錫杖の形態的特徴

素材の違いによる分類の結果、男体山頂遺跡の出土例でもそれ以外の例でも、鉄製錫杖頭は銅製のものと少々異なる形態をもつことが明瞭になった。一般には鉄製が銅製に先行するとされているが、鉄製錫杖の中での形態や区分や先後関係に関する論考はあまりみられない。実際には古代のある時期から銅製の錫杖が盛行し、鉄製品は次第に用いられなくなった。今日まで残されている錫杖の大部分は銅製品であって、この中には美術的価値の高い作品が数多く含まれ、宗教的な解釈や工芸的な観点からの解説はかなりの数に達している。

ここではあまり取り上げられていない鉄製錫杖を、形態上の事柄に限定して様々な角度から検討してみようと思う。

1) 柄に対する輪の接合法

鋳型を使用する銅製錫杖頭であると、輪や柄のみならず、その他の部分も初めから一体のものとして造形されるが、鍛造である鉄製錫杖頭は、莖蔽部分は別として、少なくとも輪と柄は別個に製作して、のちに一体に接合される。輪頂や柄の上部にみられる塔形宝瓶形などは、輪と柄の相当の箇所を削って造り出すもので、蕨手形も輪の反転を造形したものである。基本的には輪の部分と柄の部分が成型の根幹で、その他は付属と考えてよい。輪と柄の接合が、これまでみてきた23例の鉄製品ではどのようなになっているか、まずこの点から調べてみることにする。

柄の場合は錫杖頭の中心軸であるから、基本的には1本の鉄棒であって、2本3本が束ねられることはなく、また数本が上下に接合されることもない。しかし柄に対して均斉を基本にする輪は、必ずしも1本の鉄棒を湾曲させたものばかりではない。輪が柄に対して左右別体に造られたもの、

1本の鉄棒を湾曲させたもの、さらには1本の鉄棒を縦に割って左右に湾曲させたものなど、成型の仕方はいくつかに分かれる。このうち左右別体のものと鉄棒を割いたものは、区別のつきにくい例が多く、分類の上では左右別体と一体の2通りに分け、さらに各々を完全と不完全に分けてみる。欠落の多いものと銹着で不確実なものが15・17・18の3例で、これを除く20例を上記に従って区分すると第4表のようになる。

左右別体	9例
完全別体	3・4・5・6・8・14・16・20
不完全別体	13
完全一体	11例 勝道・正倉院3・1・2・7・12・33
不完全一体	9・10・11・19

第4表

これを形態別の分類に従って配分してみると次のような結果になる。

区 分	左右別体		一 体	
	完 全	不完全	完 全	不完全
第1類	0	0	2	0
第2類 a	1	0	0	0
b	2	0	0	0
c	1	0	0	0
第3類 a	1	0	1	2
b	3	1	3	2
第4類 a	0	0	1	0
合 計	8	1	7	4

第5表

大変ばらつきのある結果であるが、単純な形態である第1類と第2類の合計6例のうち、輪が一体に造形されたもの2例、左右別体の輪のもの4

例ということで、この間の相違なり推移なりを検討する必要がありそうである。輪は柄の先端の方向から下に向かって逆方向に造作された例が、男

体山頂遺跡の出土品に僅かながらみられる。図番号の1と2で、輪は1本の鉄棒を湾曲させてあり、上端が開いて柄の上部を挟み、下部が柄に対し十字形に接合されて杖頭部となっている。この手法が左右別体の輪になると、3・4・5の例にみるように、蕨手形の付着部で輪と柄を接合し、上端が開いて柄を挟む形に変化する。左右別体手法の輪で特異な形態の例は第2類cの6で、均斉であるべき左右の輪が異なった形に造られ、寸法が違っている。この錫杖頭は蕨手形まで逆に巻くが、このことについては別に触れる。

錫杖頭の先端は尖っており、通常はここが塔形・相輪形・宝瓶形・宝珠形などに造られる。鉄製でも銅製でも大部分はこの輪頂が輪の一部であり、輪と一体であるが、小数例に柄の先端が輪の外にあって、これが錫杖頭の先端部となっている場合がある。第1類の1・2、第2類aの3、同b類の4・5、同c類の6例で、いずれも錫杖頭としては単純な形の仲間であり、輪と柄の装着に関して細かく触れた例ばかりである。古い形態の特徴として留意しておきたい。

## 2) 蕨手形の造形と柄の装着法

蕨手形は錫杖頭の構図上の中心部に置かれ、左右均衡の安定した腕の上に、塔形や宝珠形などの造形が施されている。稀には蕨手形自体が鳳首や雲形に造られ、また蕨手が大きく巻いて双輪を造る例がある。錫杖頭の荘嚴には欠かせない部分で、基本的には円と直線からなる簡単な構図が、中心に蕨手形を配することにより、視覚の上でも安定感を与えていえることは間違いない。

鉄製錫杖頭23例のうち明確に蕨手形をつけないものは、第1類に区分した男体山頂遺跡の1と2の2例だけである。同遺跡の15・16の2例は蕨手形が腐朽し、欠落したものと考えてよく、分類もこの観点で第3類に仕分けた。蕨手形は輪が別体か同体かにかかわらず、宝珠形をなした湾曲の下部が均斉に内側へ曲がり、付着部を経て、輪内左

右の空間へ反転して形成される。輪の下端、付着部、蕨手形は材としては一体のもので、蕨手形だけが輪内の柄上部に接合されて形成されたものではない。これは錫杖頭の基本部分と荘嚴部分を同体のもので、一体に造形し鑄造する銅製錫杖頭でも形としては残されている。第3類cの21、同27に典型的にみるように、輪の下部の湾曲、付着部の縛、輪の反転としてのカーブを残す蕨手形などは、銅製品に先行した鉄製品がなければ造形できない形である。鉄製品がなく、初めから銅製品のみが製作されたものであるならば、反転に造形される蕨手形は不必要であって、音を発する用具としては別の装飾が案出されたはずである。近世に至るまで錫杖頭は蕨手形をつけて製作されており、鉄製錫杖頭から始まった造形が、そのまま長く踏襲されてきている。ある意味では保守性の強い装飾である。

数は少ないが、銅製錫杖頭の中には蕨手形が変形して、本来の形を失った例がある。内輪を形成する山頂出土の第4類b34、双輪を形成する山頂出土の第4類c37、同じ類の浄住寺蔵46などは、この形の中から蕨手形の痕跡を見出すのは困難であろうし、蕨手形を台のように造形した山頂出土の第3類e31、竜首に造った大日岳出土の第4類b41、雲形の装飾が大きい輪王寺蔵第4類b39なども、この仲間に入れてよい。

以上の諸例は銅製の錫杖頭に限ったことで、鉄製錫杖頭にはこのような変形がみられない。素材の関係で成型加工の点に問題があらうし、男体山の出土品でいえば、華美や軽薄を嫌う山林修行者の持ち物としてふさわしい形の錫杖であった、ともいえる。第2類と第3類に属す鉄製錫杖頭の蕨手形には変化があって、形が一様でない。銅製錫杖頭の多くが類似した蕨手形をなすのと好対象であるが、鉄製品の変化はさきに述べた銅製品のような装飾としての変化ではなく、蕨手形としての定型が成立する以前の、加工技術上の恣意的な形

と解するのがよいように思う。

具体的に山頂出土のものをみると、蕨手形の長い例は第2類aの3・第3類aの9・第3類bの13で、伝勝道錫杖はこの仲間に入り、この中では最も精美に造形された蕨手形であろう。逆に蕨手形が短い例は第3類aの7・第3類bの11であろう。巻き込みむ形になるのは第2類bの4・第3類bの19であり、これがさらに強く巻かれると第2類cの6のような渦巻き形になる。正倉院3の蕨手形はこの例と同じである。先述のように、6は蕨手形が逆方向につけられおり、しかも左右の輪が異なった寸法と形になっている。そのうえ渦巻状の蕨手形をもつ変わった錫杖頭であるが、製作上の恣意が生かされていた時代の作品と考えればよいのではないかと思う。さまざまな形と寸法の蕨手形が造られている間に、銅製品の錫杖頭が盛行するようになり、蕨手形に定型に近い形が生まれてきたものと推測できる。勝道のものはこの定型に近い形と考えられ、正倉院3は伝勝道錫杖に先行する形ではないか考える。柄と輪が接する付着部に、隆帯ないし隆線をめぐらして縛とした例が、鉄製錫杖頭の中にみられる。付着部の補強が目的であり、装飾を兼ねたものであったかもしれない。ただし鑄型で造形する銅錫杖頭には無用の造作で、これは鉄製錫杖頭の名残であり、完全な装飾である。縛のある鉄製錫杖頭は第2類bの5・第2類cの6・第3類bの12の3例で数は多くない。縛の有無のみで製作の新旧を論ずることはできないが、正倉院3と伝勝道錫杖にはこれがない。後行の銅錫杖頭に装飾としての縛をみると、縛の有無をもう少し深く考える必要があるかもしれない。

正倉院3や伝勝道錫杖のように、錫杖頭と杖部が一体になった例は数が極めて限られ、大多数の錫杖は杖頭と杖部が別体であって、杖頭の下部に両体を結合させる仕掛が造られている。仕掛は2通りで、ひとつが錫杖頭の柄を木製の杖の上端に

差しこむように尖らせた挿入形で、他は逆に杖を差しこむため錫杖頭の下部を袋状に造った袋穂形である。保管や修理のため杖頭部だけを取りはずす際には、挿入形より袋穂形が便利であるのはいうまでもなく、現存する錫杖頭の大部分は袋穂形になっていて、挿入形の錫杖頭は極めて少ない。男体山頂の出土品には17例の銅製錫杖頭があるが、全て袋穂形であって挿入形は1例もない。挿入形は鉄製錫杖頭に限られる。

挿入形錫杖頭は極めて古い形態の特徴とみなしてよいが、鉄製錫杖頭がみな挿入形というわけではない。形態分類の上でみると次の諸例がこれに該当する。即ち第1類の1・2、第2類aの3、第3類aの7・8・9・10、第4類aの33の7例である。このうち第1類は単純簡潔な形態、第2類a・第3類aも蕨手形をもつが簡潔な形態のもので、形としては二重輪になる第4類aの33が最も複雑であろう。この点で33の錫杖頭の編年的な位置づけが問題になる。

### 3 鉄製錫杖頭の編年的な位置づけ

いままで何度も触れてきたことであるが、一般的には鉄製錫杖頭は銅製錫杖頭よりも古いとされている。しかし鉄製錫杖頭の全てが古いわけではなく、これは香取秀真氏が指摘する通りであって、細かい検討が必要である。ここでは対象を本稿で取り上げた23例の鉄製錫杖頭に限り、この資料の範囲の中で前後関係を考えてみたい。検討の要素は、1. 柄の先端が輪を突き抜けた形になっているかどうか、2. 蕨手形をもつかどうか、3. 柄の下端が挿入形であるか袋穂形であるか、という3点に絞る。

柄の先端が輪を突き抜けた形になっているかどうか、という点については杖頭部の構造に関連することで、輪と柄の取り付け方をみる必要がある。IV-2-1)で「柄に対する輪の接合法」を検討し、表示によって輪が別体か一体かの区別を明確にさせ、分類に従って杖頭の形態別の数を示した。



数の上ではばらつきのある結果になったが、輪が別体であろうと一体であろうと、柄が輪の外にある突き抜け形は第1類と第2類6例に限られ、第1類は輪が一体、第2類は輪が別体ときっちり区別された。第2類はa b cに細分されるが、いずれも蕨手形をもつ仲間であって、蕨手形のない単純な形の第1類が一体作成の輪をもつことで、両者の作成上の差異が明確になった。

輪内に蕨手形をもつかどうか、という点についてはⅣ-2-2)で検討した。蕨手形は後々の定型に至るまで造形された錫杖頭の重要部分で、この発生は鉄製錫杖頭の第2類にあるとみなしてよい。蕨手形発生過程でみれば、これを欠く第1類が第2類に先行することは自明の理であろう。ただ第2類と第3類a・bの蕨手形は、輪の下部を湾曲反転させて柄に接合するという技術的な工夫がなされた時期で、規格性のない恣意の形が中心となった。この段階での蕨手形では、形の違いを区分して、その先後関係を論じようするのは少々無理であろうが、第3類aに区分した伝勝道錫杖の蕨手形が、後出の銅製錫杖頭のものに類似し、同じ区分の正倉院3の蕨手形が巻き込みになっている点で、正倉院3錫杖が伝勝道錫杖に先行するとみることできる。蕨手形には、付着部につけられた縛の問題が付随する。本来輪の一部である蕨手形を、柄に接着固定させるための部品であって、当初は実用のもので装着された。山頂出土品の5・6・12の3例にこれが認められ、どれも実用の装着である。縛は銅製錫杖頭の段階になると本体とともに鋳造され、実用上は不必要である完全な装飾になる。この点からみると、縛は鉄製錫杖頭の中でも後出のものといえなくもないが、事実は柄が輪から突き出た第2類に2例、柄が輪内にある第3類に1例であって、理屈通りにはならない。さしあたり正倉院3と伝勝道の錫杖には、縛がないことだけを指摘しておき、資料の増加を待ちたい。

錫杖頭を杖部に装着するため、杖頭の柄の下部にはこの仕掛けが造られている。杖に差し込む挿入形と、杖を差し込む袋穂形である。このうち挿入形の柄は鉄製錫杖頭に限られ、銅製錫杖頭には1例もない。明らかに挿入形が先行形態であるが、この形は鉄製錫杖頭23例のうちの8例に過ぎない。つまり65%は袋穂形であって、挿入形は数の少ない存在である。挿入形の鉄製錫杖頭は分類でみると第1類・第2類a・第3類a・第4類aにわたり、この中では第3類aに属す4例が最も多い。単純な形の第1類が挿入形であることで、挿入形が袋穂形に先行するものと考えてよい。

多少雑駁のきらいはあったが、以上までで資料の検討を終わらせ、最後に検討した項目を整理して、鉄製錫杖頭相互の前後関係を考察してみようと思う。

柄の先端が輪の外にあるものは、後出の銅製錫杖頭の形を勘案することにより、輪内に止まるものより古いとみなすことができる。これに相当するのは第1類2例と第2類4例の合計6例で、これ以外の錫杖頭にはみられない。

蕨手形は第1類の2例を除く21例につけられている。これも銅製錫杖頭の形を勘案することにより、蕨手形を欠くものは蕨手形をもつものより古いとみてよい。第1類の1・2がこれに相当する。縛は鉄製錫杖頭に3例しかなく、先後の関係が不詳である。

錫杖頭を杖部に装着する仕掛けに、挿入形と袋穂形の2種類がある。挿入形は鉄製錫杖頭に限られ、資料として取り上げた範囲の銅製錫杖頭には1例もない。後出の銅製錫杖頭に皆無の仕掛けであるとする、挿入形自体が錫杖頭全体の中で古い特徴ということになる。挿入形の鉄製錫杖頭は第1類・第2類a・第3類a・第4類aにわたるが、数は23例中8例に過ぎない。ここでも第1類の1・2が8例の中に入る。

これを通観すると、第1類の1・2の2例は各

項目のすべてにおいて古い特徴を保持していることが明白で、鉄製錫杖の年代観の基準である正倉院3の錫杖や伝勝道錫杖に先行する形態とみなす

ことができる。第1類が他の類とどのような関係にあるか、第6表によって古い要素を確かめてみたい。

区 分	柄輪外	蕨 手	挿 入	袋 穂	頭杖一体
第1類	2	0	2	0	0
第2類 a	1	1	1	0	0
b	2	2	0	2	0
c	1	1	0	1	0
第3類 a	0	6	4	0	2
b	0	10	0	10	0
第4類 a	0	0	1	0	0

第6表

表示の結果は前言の繰り返しになるが、第1類の古い特徴は、柄が輪の外に突き出すことと、杖部に対し挿入形の柄であることの2点であって、そのほかには装飾も荘厳もないことがあげられる。簡素の一語に尽きる錫杖頭である。

第1類錫杖頭に類似した錫杖は先述の文献にみられ、これは前に触れた。この部分を再度述べると次のような箇所である。唐の義浄の『南海寄帰内法伝』巻第四錫杖の割注にある部分で、大意は西方の錫杖は木製の杖の上端に径3、4寸の鉄輪をつけ、輪に鉄か銅でできた親指が通るほどの小さい環を6個ないし8個つける。環は円形か楕円形で、木製の杖は下端に幅2寸の鉄帯をはめる、ということである。杖頭は極めて簡素な造りで、そのまま第1類錫杖頭の説明になる。義浄は7世紀後半にインドから南海諸国に入り、仏典を携えて帰国した。著作『南海寄帰内法伝』は則天武后治世の天授2年(691)に刊行されている。7世紀末であって、我が国の持統5年に当たる。第1類の年代をここまで引き上げてよいかどうかは検討の余地があるが、6世紀中葉の仏教渡来とともに錫杖の伝来を説く通説を考慮するならば、義浄の見聞による錫杖の形は、我が国の古式錫杖を検

討する際の有力な参考になる。第1類錫杖頭の製作年代は大きな幅で7世紀末から8世紀、正倉院例・勝道例を勘案するならば、7世紀末から8世紀前半を想定しても大過ないと考える。

奈良時代の製作が明確な例に、法隆寺の44・45がある。天平19年(747)の「資財帳」に載せられた錫杖であるが、2例とも銅製錫杖であって鉄製錫杖とは製作法が異なり、各部分の構成がやや違っている。本稿では形態変化の時期の参考に止めておく。ここで第2類は措いておき、第3類aに入れた正倉院3と伝勝道所用の錫杖を検討してみようと思う。両例は全体が完存した錫杖で、杖頭も杖部もよく類似している。蕨手形の形から、正倉院3が伝勝道錫杖に先行するかもしれないという推定を前に述べた。正倉院の藏品は周知の通り聖武天皇の遺品や大仏開眼会・王仁会などの調度品、古文書類で、8世紀半ばに成立した。藏品の全てが奈良時代のものでないが、伝勝道錫杖や分類した鉄製品各例との対比から、正倉院3の鉄製錫杖はやはりこの頃のものと考えてよさそうである。勝道が日光山で活動した時期は神護景雲元年(767)から延暦13年(794)頃までで、その後大同2年(807)に一度男体山に祈雨の登頂を行っ

ているが、これは隣国の上野国から来訪したものと考えられる。男体山開山は天応2年(782)で、これ以降延暦13年頃までが彼の活動の盛期であった。8世紀末、奈良時代末期から平安時代初期に当たる。伝勝道錫杖は彼所持のものではないにしても、鉄製錫杖の序列の中では正倉院3錫杖に接するものであることは確かであろう。

第2類については第1類・第3類との比較から、編年的な位置づけを考えてみたい。第2類と第1類の主な相違点は、輪内に蕨手形があるかどうかと、柄の下部が挿入形か袋穂形かということである。第2類は全て蕨手形をもつ仲間であって、これに関しては明らかに第1類に後行するものとしてよい。この類で柄が挿入形になるのはaのみで、bとcは袋穂形である。第1類との比較ではb・cが後行になるが、aは第1類と同形である。この時期に柄の袋穂形が造られ第3類の時期、おおまかには8世紀後半から9世紀初め頃まで続き、その後挿入形は特殊な例を除いて消滅したものであろう。これに拍車を掛けたのが銅製錫杖頭の盛行であったと思われる。第2類に入る錫杖頭は、4例とも輪を別体に製作している。この形の輪は第1類には見られないもので、蕨手形の製作と関連する事柄と理解される。第1類のように輪を下から上のあげて柄に接着させると、蕨手形は上から下に向かってさがる第2類cの形にならざるをえない。輪を別体にしてこのように細工したのが第2類cであり、製作者の苦心とは別に、この形の蕨手形は盛行を見ることなく終わった。第2類全体は、第3類の輪と蕨手形の組み合わせ方式が成立までの、過渡的な試行段階であったように思われる。

鉄製錫杖頭は第3類の成立で、宝珠形の輪、反転する蕨手形、輪頂・柄頂の塔形造形といった1セットの定型を造り上げ、間もなく銅製品に席を譲ることになる。第3類成立の時期は恐らく第2類と並行か、やや送れる程度で、これも8世紀後

半とみておきたい。第4類aは優雅な二重輪をもつ鉄製品で、柄の下部は挿入形になっている。鉄製の挿入形である点と、二重輪は後世多用されなかった点を勘案すると、定型成立前の段階にある錫杖頭と考えざるをえない。第2類の垂式とみて、同じ頃の作品としておきたい。

本稿では銅製錫杖頭にほとんど触れなかった。分類の上で鉄製錫杖頭と交叉する第3類は特に重要であると考えており、この諸例を基礎に荘厳部分の比較や組み合わせを取り上げてみたい。鉄製錫杖頭を含めて再考を予定している。

注

- 1 『修験道章疏』二 名著出版 1985
- 2 Le Goq 『Die Buddhistisch Spätantike in Mittel Asien』 Berlin 1923
- 3 本稿に引用した経典は全て『大正新脩大藏経』による。  
なお錫杖関係の経典・文献は小野玄妙「錫杖略説」『考古学雑誌』1-7に詳しい。
- 4 『群書類従』釈家部 24
- 5 『続群書類従』釈家部 27
- 6 注4と同じ
- 7 『東大寺要録』 図書刊行会 1971
- 8 Stein 『Serindia』 Vol.1V OXFORD VN IV.1921
- 9 大和久震平『古代山岳信仰遺跡の研究』 名著出版 1990
- 10 『日光山輪王寺宝鑑』 日光山輪王寺宝鑑 1966  
大和久震平『日光市史・史料編上巻 考古』 日光市 1986  
この資料観察については日光山輪王寺の特別の配慮をえた。
- 11 『正倉院の金工』 正倉院事務所 1976  
香取秀真『仏具(錫杖)』 日本書院 1936
- 12 香取秀真 注11

- 13 三宅敏之「錫杖」『日光男体山』 日光二荒山神社 1963
- 14 三宅敏之 注13  
大和久震平 注10  
日光二荒山神社の特別の配慮により全資料を観察することができた。
- 15 大和久震平 注10  
日光二荒山寺の特別の配慮により全資料を観察することができた。
- 16 香取秀真 注11
- 17 『特別展・笈と錫杖』 東京国立博物館  
『特別展・ブック紀導』 奈良国立博物館 1984
- 18 石田茂作『那智発掘仏教遺物の研究』 東京堂出版 1981
- 19 『特別展・山岳信仰の遺宝』 奈良国立博物館 1985  
この資料については藤田定興氏の配慮をえた
- 20 香取秀真 注11
- 21 香取秀真 注11
- 22 香取秀真 注11
- 23 『重要文化財』金工 仏具3 梵音器 i 文化庁
- 24 この分類は拙稿「古式の錫杖」『山岳修験』第5号(1989)に略述した。  
前稿ならびに本稿の資料・文献につき亀井正道氏に教示を頂戴したほか、注記の社寺・研究者の方々から配慮を頂いた。銘記して感謝の意を表する次第である。